

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 中里見敬編著 『『春水』手稿と日中の文学交流：周作人、謝冰心、濱一衛』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 洋子, Okubo, Hiroko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000553">https://doi.org/10.57529/00000553</a>

〔書評〕

中里見敬編著

『春水』手稿と日中の文学交流

— 周作人、謝冰心、濱一衛 —

大久保洋子

本書は、中国近代の作家・詩人である謝冰心（一九〇〇～一九九）の詩集『春水』（一九二三）の手稿が九州大学附属図書館濱文庫で発見されたことを記念して、二〇一八年二月六日に九州大学伊都キャンパス新中央図書館で開催された国際シンポジウム「春水」手稿と日中の文学交流…周作人、冰心、濱一衛」で発表された論文の中から一三編を収録したものである。

『春水』の詩篇は、一九二二年三月二日から六月三〇日、『晨报副鐫』に掲載された。同年一月、冰心は当時在学中であった燕京大学の恩師、周作人（一八八五～一九六七）が主編する新潮社文藝叢書の第一冊として『春水』を出版するため、手稿を完成させ、周作人に渡した。『春水』出版後、手稿は周家に

残されていたが、周作人が一九三九年に蔵書を整理した際にこれを発見、装丁し、長男・豊一（一九二二～一九七）の友人で作人も親しく交際していた中国演劇研究者である濱一衛（一九〇九～八四）に贈った。これが『春水』手稿が九州にわたるまでのおおよその経緯である。詳しくは本書収録の中里見氏の論考および編集後記を参照されたい。

国際シンポジウム開催に先立ち、手稿発見の事実は『中国現代文学研究叢刊』二〇一七年第六期に発表され、さらに中国福建省の冰心文学館が編集・発行する学術誌『愛心』編輯部の呼びかけにより、日本の研究者一二名の記念論文が同誌二〇一七年夏期号に掲載されている。国際シンポと本書の刊行は、手稿発見をめぐるこれら一連の学術交流活動の集大成であり、大きな記念碑的意義をもつものといえよう。

本書収録の序文および論文目録は以下の通りである。

序

宮本一夫 「『春水』手稿と日中の文学交流」 国際シンポジウム開会の挨拶

萩野脩二 「春水」所感…国際シンポジウム「春水」手稿と日中の文学交流」に寄せて

I 「春水」手稿の発見とその意義

中里見敬「九州大学附属図書館瀆文庫所蔵の『春水』手稿…周作人、冰心、濱一衛」

趙京華「東アジア同時代史から見た中日文学」

潘世聖「『春水』手稿…九五年の劇的な旅路の点と線」

Ⅱ 周作人と謝冰心、小詩運動、『春水』

周吉宜「周作人と冰心…早期冰心女士と我が祖父の往来」

小川利康「小詩運動の周辺…周作人と謝冰心」

平石淑子「謝冰心とタゴール…『春水』と『Stray Birds』」

佐藤普美子「『零碎的思想』のうねり…冰心『春水』再読」

牧野格子「英訳本『春水』における翻訳手法と新解釈への可能性」

顧偉良「瀆文庫発見の冰心詩集『春水』手稿…『文』に関する美意識の変容及び周作人の批評精神をめぐって」

Ⅲ 謝冰心の文学活動、および日本との交流

濱田麻矢「女学生謝婉瑩から作家冰心女士へ」

岩崎菜子「占領軍検閲資料から発見した謝冰心佚文と発見の遅れに関する考察…戦後日本の謝冰心と丁玲に対する相反する評価を通して」

宮本めぐみ「冰心の講演録『中國文学をどう鑑賞するか』の中  
国語原稿について」

虞萍「越境する『忘年の交わり』…謝冰心と有吉佐和子との交流に焦点を当てて」

中国近代文学研究における『春水』手稿発見の意義は、趙京華氏が指摘するように、①日中近代文学の交流史の一端を明らかにし、東アジア同時代史を考察する上での歴史的価値②周作人と謝冰心の関係を研究する上での手掛かり③版本（この場合は『春水』を比較校勘する際の模範と基準の提供——の三点に集約できるだろう（なお、趙氏は③を第一に挙げている）。本書の構成と編集意図もそこにある。手稿が謝冰心本人からではなく、単行本主編であった周作人という第三者から、謝冰心研究者ではない濱一衛に贈られたことによって、手稿発見という文学史的事件には複数の意味が生じ、また発見をめぐる論稿のテーマも多岐にわたることとなった。それらの多層的な要素を三部構成として一冊にまとめ上げたのは、ひとえに編者である中里見氏の手腕によるものである。

このうち、①についてはⅠの論文三篇が、②についてはⅡ収録の周論文、小川論文が十分にその意義を説明している。特に中里見論文と周論文は、周作人と謝冰心、周作人と濱一衛の交流の様相を生き生きと浮かび上がらせ、単純に読み物として読んでも非常に面白い。小川論文は周作人と謝冰心の交流の中で

も、二人の接点と指導関係に光を当て、周作人の小詩運動における謝冰心の位置づけを探った、示唆に富む論考である。

『春水』のテクスト研究の成果としては、Ⅱの平石、佐藤、牧野各氏の論文が、それぞれの視点から作品分析を進めており、これらを通して謝冰心と『春水』について理解を深めることができる。また、いずれの論文も『春水』の引用箇所は手稿に基づいて校勘しており、その意味でも信頼に足る。

ここまでがいわば本書の前半部分であるが、これらの一連の論考のまとまりに反して、後半部分の構成は、本書のテーマからはややかけ離れた印象を受けた。特に、本書の議題の核心であるはずの手稿そのものについて、具体的な価値を伺い知ることができなかつたのは残念である。関係者の方々には様々な事情があることと推察するが、Ⅰで打ち出した東アジア同時代史という「大きな物語」がより一層の輝きを放つためには、それを支える「小さな物語」——作家研究、作品研究にこそ、力を入れる必要があるのではないだろうか。版本研究がその極めて重要な一端を担うことは言うまでもない。関係諸氏が多くの課題を乗り越え、研究を進められることを願うばかりである。

ここで考えたいのは、謝冰心文学の再評価の問題である。佐藤、岩崎両氏が指摘するように、謝冰心という作家、およびそ

の文学は、社会主義リアリズムに価値基準を置くこれまでの中国近代文学史において、さほど高く評価されてこなかつた。この度の手稿発見は、謝冰心文学の再評価に大きな機運をもたらすものである。この重要な機会に、研究史上残されてきた課題をどのようにすくい上げていくのか、手稿発見がそのことにつながるに間違いなく、そこから謝冰心の何が見えるのか、といった問題について、考えていかなければならないであろう。

この意味で、謝冰心の講演原稿について緻密な校勘を行った宮本氏の論文は、謝冰心の実証研究における学界の底力と可能性を示すものであると感じた。『春水』に関しても、実証面での大きな成果を期待したい。

右に示したような観点から、以下は本書収録論文のうち評者が特に興味をもつた論文について、概要と意義を述べたい。

平石論文は、謝冰心の最初の詩集である『繁星』（一九二三）の序文から、謝冰心のタゴール受容と『繁星』の成立時期を従来よりも早く設定し、『繁星』と『春水』の時間的隔たりの大きさを指摘した点が興味深かった。『春水』詩篇を構成する一連のイメージが『繁星』ですでに始まっているものの、『春水』ではより深い思索がみられるとし、内容面でも両者の隔たりがあることを指摘している。これは次の佐藤論文にも通じる見解

である。タゴールから『繁星』そして『春水』へと流れ込むイメージはどのように受け継がれ、変化を遂げたのか。今後より深い分析を期待したい。

『春水』は研究史において、芸術面では「零碎な思想の寄せ集め」とされ、文学史上は先に述べたように限定的な評価にとどまる状況が続いてきた。しかし新詩の発展可能性と芸術性、思想性を根幹に置いて評価するならば、謝冰心とその詩篇群はこれまでの評価とは別の姿をもって我々の前に立ち現れるに違いない。佐藤論文はこのような視点から、『春水』の読み直しを試みるものである。同論文は、『春水』全篇を綿密に分析し、『春水』の詩篇に使用されるイメージは、これまで定説となってきた「母の愛」、「童心」、「大自然の賛美」にとどまるものではなく、単なる牧歌的な詩篇にはない、より深い陰影に富んだものであることを論証する。詩篇群が表現する、日々湧き起こる刹那の感興のうねりを、テクストに語らせることによって示していく手法は圧巻である。

牧野論文は、謝冰心の恩師であった米国人教師ポイントン（一八九〇～一九七〇）の文書を全面的に分析、紹介し、ポイントン訳『春水』の特性を通して浮かびあがる『春水』新解釈の可能性を丹念に追いかけている。ポイントン書簡に描かれる

謝冰心像の紹介も興味深い。中国のみならず欧米にまで目を向けた先行研究調査も価値が高く、研究者として大いに教えられた。文学史における新たな謝冰心像を打ち出す可能性を秘めた成果である。

濱田論文は、謝冰心の小説を題材に、「知性ある少女」が批判的に描かれる同時代の男性中心主義的ナラティブの中で、「知的でありながら男性社会と調和する女性」の存在可能性を示したことが、謝冰心の小説創作における主眼であり、近代文学史における謝冰心小説の新しさであることを示す。家庭環境に恵まれ家族から愛される少女像は、謝冰心小説の代表的イメージであり、かつての文学史では消極的に評価されがちであったが、濱田氏はその点にこそ謝冰心小説の積極的意味を見出している。作家・作品の再評価は、これまでの評価軸に沿った読みを提示することや、新史料を発掘することのみにあるのではなく、まったく別の視点をもって、これまで否定されてきたまさにその側面に光を当てることにある、そのように思わされた論考であった。

本稿では紙幅の関係ですべての論文に触れることができなかった。ご寛恕いただきたい。しかしながら、いずれの論考も、中国近代文学の知られざる一側面に新たな光を当てるものであ

る。評者もとりもなおさず、本書を手を取ったことで、謝冰心文学の魅力に目を開かされた一人である。関係諸氏の粘り強いご尽力により、今後、さらに新しい謝冰心像、ひいては中国近代文学史が我々の前に示されることを心より願ってやまない。

(A5判、二五五頁、花書院、二〇一九年三月発行、定価三〇〇〇円＋税)